

ノンフィクション

松代皇居への道

おお 兄弟よ!!

著 者 馬 場 英 一

発行所 ^{はな}華 書 房

発行者 ^{すえ}末 ^{ひろ}広 ^ち千 ^{さち}幸

東京文京区後楽2-1-14

電 話 (812) 3 5 5 8

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製 本 黒柳製本株式会社

ノンフィクション

松代皇居への道

おお 兄弟よ!!

当時 思想戦参謀 馬 場 英 一

居への道……………6

作白馬関……………17

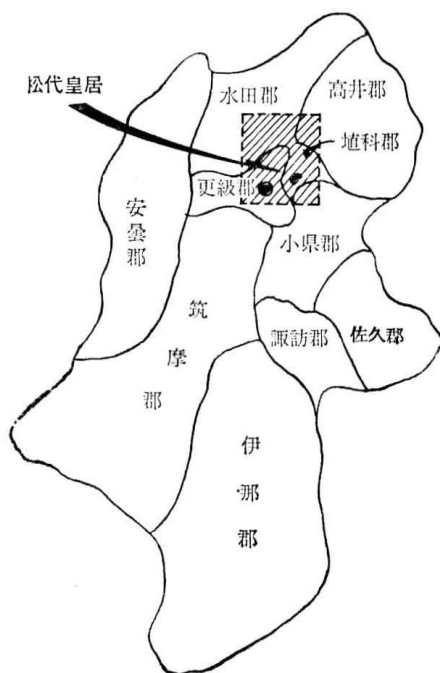
カタ山脈……………99

松代皇居への道

おお兄弟よ!!

長野県略図

松代大本營
著者生家



昔

——ある日本人は
あなた方を 皆殺しに
しようとした

今

——又 なお

日々

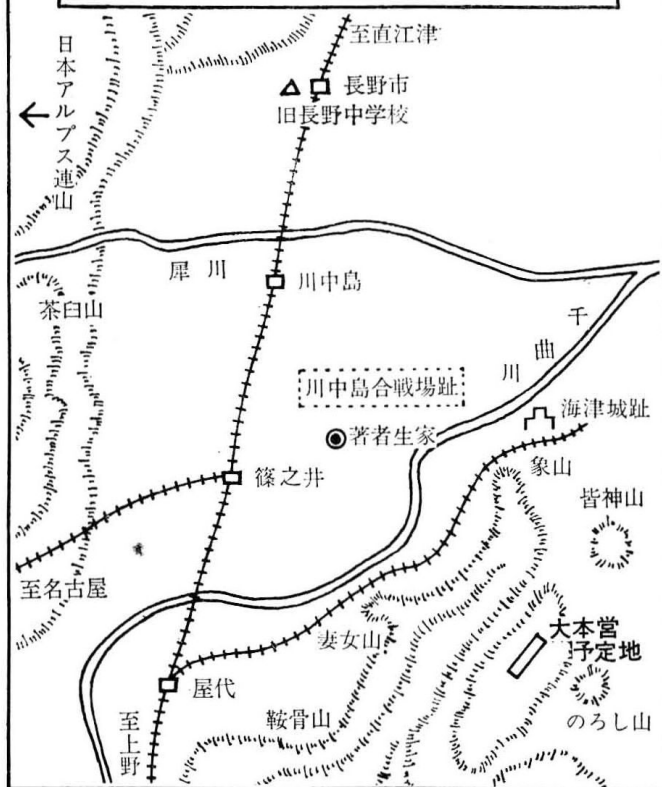
平和のかげに

松代^{まつしろ}への道は

続いていないだろうか

おお 兄弟よ

長野県松代大本營(皇居)略地図



松代大本營の造営

昭和十八年の夏頃から、兵士が数名づつ、しきりに、松代まつしろの町をうろついているのが、人々の注目を惹いた。

「兵營もないのになあ」と町民はいぶかった。

翌、十九年の二月の初め頃、松代町の真南に、聳立している、倉骨山くらほねやまの頂上に、旗が立てられた。測量標識であった。

村人達は、何事だろうかと、注目しながら、せっせと供出の馬鈴薯ばれいしょをつくっていた。

すると、七月に入ったばかりの或る日、突然、松代町役場に、将官を交えた数名の軍人がやって来た。

「少し大掛りな土木工事をするから協力して欲しい」

と半ば命令的に挨拶した。

「何のための」という説明は与えられなかった。

中沢司^{なかざわつかさ}は、その頃小学校の校長をしていたが、家に客があるという知らせで、自転車をとばせて帰って見ると、役場を訪れた同じ軍人達とおぼしい将兵たちが、昼食をしたためたいからと言って、そのあたりでは、目立つ少し大きな彼の家にやって来たのだった。

妻は、彼等の昼食作りに、一生懸命勝手元で働いていた。

司は、坐敷に上って、寝ころんだり、シャツ一枚になって、大あぐらをかき、喋っている、この招かざる軍人達に、なんと挨拶してよいか、途方にくれた。

彼等は地図を開き、司の家の、真南に見える、倉骨山を、しきりに指さしては、何か小声で話している。

少し左手に妻女山^{さいじょやま}、少し右手に象山^{ぞうざん}、離れ山が見え、その上には、のろし山が、らくだの二つの背のこぶのように、そびえて居り、皆神山^{みなかみやま}はその左に、すりばちを伏せた形を見せている。

のろし山には、わらびが出て、よく一家総出で登る山、すぐ北の柴山からは、良質の花崗岩が出て、片面がけずり取られている。

秋の名月の頃は、姥捨山^{うばすてやま}の四十八田に映る月は、柴山のうしろ鏡台山^{きやうだいやま}から登る。

皆、川中島合戦の古戦場として、名高いものばかりである。

今、かれらは、その山々を指さして、しきりに密談を交している。

そして、出来た昼食と共に、出された、取って置きの国盛^{くにもり}一本を、さも当然のことにように、ガブ飲みして、ろくに礼も言わず立去った。

「いい気なもんだなあ」

「それにしても、一体何事だろう」

司は妻に言った。

その晩、彼等は、松代一の旅館、一陽館に投宿した。そこには、彼等以外の多数の将官が合流した。

まもなく、西条部落から、時計の針も止り、家も傾く程のダイナマイトの爆発音が、昼夜をわかつた、響き渡り始めた。

屋代駅ヤしろから出た幾台のトラックには、一大部隊が乗っており、少しおくれて、松代部落の方から始まり、人々はそれについては何事も知らされず、又言いふらすことも禁じられた。

山裾には、ずっと有刺鉄線がはりめぐらされ、工事に従事する人々の、バラック小屋のまわりには、高い板べいが立てられた。

大鳥島おおとりじまに、米機動部隊が来襲したという報告の入った、五月の或る日、

「敵も、仲々やるじゃないか」

「この分だと、東京空襲も時間の問題だ」

折しも晩春であった。

平常なら、行楽に絶高頂の頃だ。

參謀肩章が重々しい、大島高級參謀の眉に焦躁が濃い。

「経済人や、閣僚の一部にすら、軟派が出初めている……」

「儲ける時は、しこたまもうけて、もう逃げ腰か」

「今更、和平もへったくれもあるもんか、徹底反撃、焦土抗戦、俺達に逃げ道はあるもんか」

「もっと海から遠い所へ、大本営を移した方がいいんだが……」

「俺もそれを考えているのだ。どうせ弱腰共は渋るに決っているが、その時は斬る——。

用意して置く分には早い程いい、昨晚も、信州の山の中がいいと言った奴があつたんだが」

「信州はいい。あの上空は気流も非常に複雑だし、航空機が入り憎い。高い所だと、レーダーもよくきくし——。信州といつてもどの辺がいいか」

「上杉、武田の合戦をもう一辺、川中島でやるか」

この話しの実現が、こんなに早く来ようとは、話していた大島參謀達でさえ、夢想だにしなかつたことであつた。

これを決定的にしたのが、十月の台湾沖東方の空戦の後であつた。

これは空戦と呼ぶべきものの最後であつた。

マックアーサーの「かえる飛び作戦」が効を奏して、日本軍の重要な前衛基地をよけて、どんな弱い所、弱い所を狙つて北上して来る。

同じ、十月には、沖繩、宮古島みやこじま空襲、台湾たいわんもやられた。

十一月に入ると、B 29は、東京と九州にもやって来た。満洲でも、奉天がしきりに、空襲され出した。

「源兵衛さん、わしゃどうもおかしいと思うんだが」

その日の夕方遅くまで使役に駆り出されて、くたくたに疲れて帰って来る道すがら、一緒に足を引摺っている源兵衛さんに、小声で話しかけたのは、安太郎であった。

「何がよ」

源兵衛はいかにも物うきいた。

「それがさ、今日俺等が、貨車からトラックに積み換え作業をした荷物に、菊の花が捺してあったのよ。菊の花の紋といえは、天子様の紋所じゃねいか」

「ふうん、それには違いないが……」

こんなことがあってから、この話しは皆んなに知れ渡って、天皇様が、松代まつしろに來られる、あの、ドカンドカンと堀っている穴の中に來られる、という噂は一般に拡がった。

米軍は、日本が焦土抗戦に出る、大本營が信州に移るといふことは、とうにキャッチしていた。

暗号解読の特別機関、ブラックチェンバーは、誰が何時、どこからどこへ行くという事まで、すっかり分って居り、先まわり、先まわりして待ち伏せしていた。

信州へは、不思議と、一発の爆弾も落ちず、B 29は、舞鶴まいずるや、新潟にいがたなどをやっている。

それが突如として、長野機関庫の真上に落されて、またたくまに、これを炎上させてしまった。又、山中の地下工場に移転しようとして、極秘裡に、一切の機類を目的地に運んだ所を、荷下して、まだ梱包も解かないうちに、すっかり爆破されてしまった。

「何処へ逃げたって、一寸こんな調子だぞ」と言わんばかりであった。

いずれにせよ、長野機関庫の被爆炎上も、日本の徹底抗戦派の夢を、さませはしなかった。彼等は、洞窟の深度を深めることに、設計の一部を変更する位のことと、どんどん奥へ奥へと掘り進んだ。

内部には、天皇陛下の御坐所を始めとして、皇族方の寢所、司令官室、その他必要な施設を、どしどし備えて行った。大本営が、ここに移るということは、決定的な事になっていった。

四月十二日、ルーズベルト大統領がたおれ、副大統領トルーマンがその後を襲い、最初の臨時議会で、

「米国は、日独伊の無条件降服迄、徹底的に戦う」

と宣言した。

二十七日にムッソリーニが逮捕され、二十九日にヒットラーが自殺した。

後は、ただ日本一国が、桑港会議に集った、四十六ヶ国を相手に、戦うことになった。鈴木貫太郎すずき かんたろう大將首相は、これらの情勢の中で、

「欧州戦局は、急変したが、日本は最後まで戦争を完遂する」

と決意を表明した。そして、一億国民義勇戦闘統卒令を公布した。

米軍は既に、三十一日ナハ首里に突入した。

七月に入ると、サイパンを基地として、米飛行機、艦載機は、連日、連夜、日本全土を空襲した。

八月二日に、ポツダム宣言が公表されたのに対して、日本は何の応答もなかった。遂に、原子爆弾が投下された。

そんな事は知らぬ氣に、又知っていただけに、その間も、「松代大本營」の工事は、昼夜兼行で進んで行った。

永祿四年（一五六一年）武田信玄が、本陣を築いた、海津城の近く、文化、文政の頃、（一八一一年）、佐久間象山が、此上もなく愛した象山から始めて、のろし山の真下を通り、松代部落迄の、約四キロを、高さ三米、深い所は、六米ものトンネルを造るのである。

東の堀口は、

国のため重きつとめを果し得て

兵弾つき果て、散るぞ悲しき

の辞世を残して、硫黄島^{いおうとう}で自決した、栗林大将^{くりばやし}の生れた西条村^{さいじょう}、西の口は、松井須磨子^{まついすまこ}の生れた松代町^{まつだい}。

この大工事が、只、二三人の熱狂的な抗戦主義者だけによって、決定され、開始され、ほとんど完成に迄こぎつけることが出来たとは、絶対に言えない。

幾度かの参謀会議、御前会議を経たものであることは間違いない。

相つぐ、総力戦体制整備に関する命令、命令に、なれっこになっていた村の人々も、この有刺鉄条網を張りめぐらした山の地下での工事、かくも重大な工事に、キモを冷したのも多かった。口にこそ出せなかったが、心の中で、どうなる事かと思った人は多くいた。

鳴物入りの大戦果、景気のよい報導ばかり聞かされていた日本国民ではなかったか。

「神州不敗^{しんしゅうふはい}」「現人神^{あらひとがみ}の統べ給う国^す」の現人神、天皇陛下が、この穴倉^{あなぐら}においてになるという……。

「教育とは繰り返すことである」

ということが、この時代程、徹底的に、はっきりと証明されたことはなかった。

それにしても、その当時の軍人は、心底、何を考え、何を思っていたのだろう。

知って犯した罪と、知らずに犯した罪とでは、知らずに犯した罪の方が、罪は重いという。

無智蒙昧の徒が、犯した罪のなんと大きく、深いことか。

仁科博士が、広島に落された爆弾が、原子爆弾であると報告すると、皇居内のペトン造りの大本営の内では、首脳会議が、そして、御前会議が開かれた。

何の応答もしていない、ポツダム宣言を受諾するか、どうかということである。

「今日あるを期して、松代には、すでに、不落の陣地が完成してございます。今更何を恐れ、何をばかって、この屈辱的な降伏状に答える必要があります。しかもあの文書には、国体（こくたい）に対して、何も言っては居りません。敵は、天皇陛下に対し奉っても、何を言いだすか判ったものではありません。万世に伝えられる、国体護持、このためには、いかなる困難をも忍ばねばなりません。いざ、速かに御遷坐（ごせんざ）を」

それから、八月十五日に至る迄の混乱は、二・二六事件前夜の如くであった。

しかし、遂に、八月十五日終戦を迎えたのである。

松代における混乱は、もっともひどいものの一つかも知れない。

今迄銃剣に追い立てられ、粗食にたえて、強制労働に服せられていた幾千人の外国人達は、主に鮮人達は今や戦勝国民として、巷にどっと散乱したのだ。このことに對する想像はつくであろう。軍人達は、いち早く、平服に着替えて、或は屋代（やしよ）の駅にかけつけ、或は、トラックを運転して、

いづこともなく消え失せた。

菊花の紋章のついた調度品、その他金目のものは、みな彼等に持ち去られた。

檜造りの建物は、見るかげもなく破壊され、昭和三十四年に地震研究所が、十人の人で始められるまで、松代の皇居は、噂の真偽も分らず、放置されていた。現在でも多くの日本人は、このことを知らないであろう。こうしたことが、歴史の影に、蔽存したということは、日本人の心の問題である。

こうしたことの起り得る根はどこにあるのか。

松代皇居への道が、今もなお、ひそかに続いているとは断言出来ない。

そのためにも、日本人の外貌を今一度「歴史の小銭」をしてこの点からふり返ってみようとするのである。

その頃、この「歴史の小銭」の主人公は、何処で何をしていたか。